



Title	共生学コミュニティガーデンの現在と未来に向けて
Author(s)	平木, 雅
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 115-124
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

共生学コミュニティガーデンの現在と未来に向けて

平木 雅

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

要旨

本稿では、大阪大学人間科学部本館棟の近くに位置する共生学コミュニティガーデン（以下、共生学 CG）の現在の活動状況を整理し、共生学 CG が抱える課題を共有する。そもそもコミュニティガーデンとは、これまでの既存の知見を整理すると、オープンスペースや緑地空間としての機能を有するだけでなく、周辺環境や関わる人々によって形づくられ、コミュニティ醸成の役割を有する場である。しかし、こうした定義は広義的で曖昧なものであり、共生学 CG も同様に、曖昧な場と捉えることができるだろう。現在、共生学 CG では、主に 4 つの活動、「養蜂」・「畑」・「コンポスト」・「ビオトープ」に取り組んでいるが、これらの活動に限らず、今後も新たな共生学の実践が行われていくことが想定される。しかし、共生学 CG が抱える課題もいくつかあり、本稿では共生学 CG における「コミュニティ」とは何か、共生学 CG の「目的」とは何かについて着目し、現状を踏まえながら論じた。

キーワード

共生学
コミュニティガーデン
緑地
オープンスペース

1. はじめに

共生学コミュニティガーデン（以下、共生学CG）は、大阪大学人間科学部本館棟のすぐ近くに位置し、人間科学部・人間科学研究科の講義などで活用されている「共生学」の実践の場であり、実験の場でもある。例えば、博士前期課程の必修である「人間科学学際研究特講」では、グループワークのテーマとして共生学CGが扱われたこともある。共生学CGは、こうした立地条件や講義などによって人間科学部・人間科学研究科の構成員であれば、何かしらの形で接している場と考えられる。しかしながら、依然として共生学CGの認知度は低く、その実態もほとんど知られていないと感じている。共生学CGは、大阪大学人間科学部共生学系環境共生学分野（以下、環境共生学分野）の学生や教員が中心となって取り組んできたが、現在は環境共生学分野だけでなく、他学系や工学部の学生など垣根を越えて、様々な人が関わる場になりつつある。

本稿では、比較的、共生学CGに積極的に関わっている著者の立場から、そもそもコミュニティガーデンとは何かを説明したうえで、共生学CGの現状について課題を含めて整理し、共生学CGにおける「共生学」の実践を通じた「共生」の実現への貢献について論じたい。

2. コミュニティガーデンとは

具体的に共生学CGを説明する前に、コミュニティガーデンとは何かをまず説明する。コミュニティガーデンの定義はいくつかあり、Guitart（2012）はコミュニティガーデンに関する世界中の学術文献のレビューから、コミュニティガーデンを広義的に「地域社会のメンバーによって管理・運営され、食料や花卉が栽培されるオープンスペース」と定義している。越川（2002）は、アメリカのコミュニティガーデンの事例を通じてコミュニティガーデンを5つの観点から、①様々な人々が庭として共用できる緑地空間、②地域社会への参加のきっかけづくりの場、③地球環境や地域問題について学び、体験できる生きた社会教育の場、④地域の庭づくりから始める緑のまちづくり活動、

⑤コミュニティ再生のための市民の草の根運動、として定義している。

一方、日本におけるコミュニティガーデンについて平田・陳(2003)や佐倉ら(2022)は、明確な概念や定義は存在しないと指摘する。平田・陳(2003)は、「コミュニティという用語にしても、ガーデンという用語にしてもその意味は広く、人によって受けるイメージも異なることから、それぞれの人がそれぞれの想いで取り組み、できあがったものをそれぞれに「CG」と称しているのが実状である」と述べている。佐倉ら(2022)は海外に比べて多様な特徴を持つ日本版コミュニティガーデンが存在する可能性を言及し、信州大学佐倉研究室「まち畑プロジェクト」の、畑と周辺環境のプラスαの用途からなる「まち畑」の定義から、「町中の空地を複数の市民が主体となって、畑と地域に求められる用途に変容している場所」としてコミュニティガーデンを定義している。佐倉ら(2022)による定義は、多様な特徴を持つコミュニティガーデンを包括するような広義のものとして説明されている。こうした多様な定義を踏まえると、コミュニティガーデン自体、多様な特徴を有する曖昧な場といえる。

また、越川(2002)が「コミュニティ再生のための市民の草の根運動」と述べるように、コミュニティガーデンはコミュニティ醸成を促すような役割や効果を有している。そのため、コミュニティガーデンはコミュニティづくりの一つの手法や手段としても捉えることができるだろう。加えて、佐倉ら(2022)は、コミュニティガーデンの場所や立地の特性について、どのような場所でも欠点以上に利点がある場合にはコミュニティガーデンになりうることや、コミュニティガーデン周辺の敷地や地域の歴史や風土、行政の条例の有無に影響を受けることを明らかにしている。

こうしたコミュニティガーデンの定義などを踏まえると、コミュニティガーデンは、オープンスペースや緑地空間としての機能を有するだけでなく、周辺環境や関わる人々によって形づくられ、コミュニティ醸成の役割を有する場といえる。

3. 共生学コミュニティガーデンの現在

現在の共生学CGを説明する前に、これまでの共生学CGの変遷について、

簡単に整理する。

共生学CGは、2023年ごろから人間科学部共生学系コンフリクトと共生分野（現 環境共生学分野）のモハーチ ゲルゲイ准教授（現 教授）と太田貴大准教授、加えて当時の学生らを中心に始まった取り組みである。当時は、分野に所属する学生も他分野から関わる学生も極少数だったため、0から作っていく楽しみと同時に大変さがあったと考えられる。2023年度には大阪大学共創DAYにも参加しており、実社会との関係をつくることも試みてきた。現在では関わる人々も増えつつあり、どのように共生学を実践していくかが問われている段階ともいえる。

こうした手探りの共生学の実践を通じて様々な人と協働しながら、現在は次の4つの活動、「養蜂」・「畑」・「コンポスト」・「ビオトープ」を中心に組み込んでおり、これらについてそれぞれ説明したい。なお、各活動は執筆時点の状況であり、現在も同様の内容で継続して活動していない可能性があることをご容赦願いたい。

3.1 養蜂

共生学CGでは、ニホンミツバチとセイヨウミツバチの2種を飼育し、これらのミツバチから蜂蜜をいただいている。ミツバチは、都市生態系の中でポリネーター（送粉者）の役割を有しており、共生学CGを含む各地の植物や農作物の受粉に欠かせない存在である。ミツバチからいただいた蜂蜜は、大学祭での試食会や瓶詰の販売を通じて、たくさんの方に味わっていただいている。また、養蜂は国際交流にも一役買っている。養蜂を通じて、インドネシア・カリマンタン島のパラカラヤ大学の養蜂サークル（My Bee Kelulut）と交流しており、インドネシアの現地視察なども行っている。今後の取り組みについても、現地の学生と協力しながら企画を行っている段階にある。共生学CGでの養蜂は、自然との共生だけでなく多文化共生的な側面も有する活動といえる。

3.2 畑

共生学CGでは、野菜や花、果樹などを育てている。これらは講義の一環

で行われることや、共生学CGの参加者が自主的に栽培することもあり、多種多様な作物が栽培されている。例えば、パパイヤやカカオなど熱帯地域の果樹なども栽培しており、栽培品種の選定は参加者の趣味嗜好によるところもあるといえる。また、ヘチマの栽培は講義の一環での栽培であるものの、これをきっかけとして学生らが自主的に他の野菜などを栽培している姿も見られている。これらの植物は人に作物を供給するだけでなく、蜜源植物としての側面も有しており、ミツバチもこれらの植物の恩恵を受けている。加えて、収穫量が多いビワなどは、これまでに人間科学部内で配布したこともある。こうした取り組みは、共生学CGに直接関わる方々が作物から恩恵を受けるだけでなく、植物や食を通じて共生学CGや共生学に関心を集めるような実験的な取り組みともいえるだろう。

3.3 コンポスト

コンポストとは、一般的には生ゴミや落ち葉などの有機物を微生物によって分解して堆肥化することや、この堆肥化を行う容器のことを指す。共生学CGには、主にミミズなどを活用したコンポストと自然素材を活用したバイオネストと呼ばれるコンポストがある。ミミズなどを活用したコンポストは、主に生ゴミや紙くずなどを堆肥化するために使われている。バイオネストは、剪定枝や落枝などを組み上げ、落ち葉や雑草を中心に堆肥化するものである。特に後者は、虫や鳥などの身近な生き物の生息地や餌場としての側面も有しており、コンポストとしての機能以外も持っている。いずれのコンポストも、生活から出た廃棄物やキャンパス内の落ち葉などを再利用する形で運用しており、日常生活と繋がるような自然との共生の実践といえる。

3.4 ビオトープ

ビオトープとは、生物群集に注目し、空間的にまとまりのある、ほぼ均一な自然のかたまりのことを指す（公益財団法人日本生態系協会 2016）。一般的には水辺の生物のみを指すように思われがちであるが、それは誤用である。共生学CGでは、小規模ではあるが、プラ箱などを用いて水辺の動植物を中心としたビオトープ作りを行っている。このビオトープの取り組みは手探り

でもあるため、大阪府内の高校との連携を始めに地域でビオトープに取り組んでいる方々と交流しながら、共生学CGにどのようなビオトープを作るべきか日々、試行錯誤している。共生学CGにおけるビオトープは、自然との共生の実践でありながら、地域社会との共生の実践ともいえるかもしれない。

3.5 まとめ

主な4つの活動のみを説明したが、これらの活動は執筆段階の主なものである。これらの活動は各個人に依存している側面もあるため、今後も継続されるかどうかは分からない。共生学の実践として新たな活動を試み続けることが重要と考えており、既存の活動にとらわれない視点も不可欠である。

また、共生学CGでは前述した活動以外にも様々な取り組みを行っている。例えば、「養蜂」でも触れたように大学祭（いちょう祭・まちかね祭）への参加も行っており、人間科学部だけの、吹田キャンパスだけの取り組みで終わらないように実践している。また、共生学CGを活用した実践としてネイチャーフィーリング・自然「感」察会を行っており、こちらについては本号の別稿を参照されたい。

このように様々な活動を行っている共生学CGだが、抱える課題も同様に多様である。次章では、共生学CGが抱える課題に触れながら、共生学CGの未来に向けて課題を議論したい。

4. 共生学コミュニティガーデンが抱える課題と未来に向けて

共生学CGが抱える課題はいくつか存在する。例えば、「共生学CG」という名称もひとつの課題といえるかもしれない。共生学CGは、コミュニティガーデンの定義の曖昧さに加えて、「コミュニティ」や「ガーデン」と同様に人によって理解が異なりやすい「共生学」が加わる。そのため、共生学CGに対する各人の認識や理解は異なり、より曖昧な場になっているといえる。さらには「共生」CGではなく、「共生学」CGであることも議論となりうるだろう。この点について、志水ら（2020: 25）が「（中略）共生学の場合、研究活動を行うことそれ自体が、共生の実現に向けての第一歩とみなすことができる。」と述べる

ように、共生学は「共生」の実現に向けてのプロセスでもある。「共生学」CGも「共生」を実現するプロセスのひとつであると考えれば、曖昧さを強化するとはいえ、「共生学CG」は妥当な名称といえるだろう。

しかし、このような課題といっても共生学CGに関わる方々によって、その課題に対する認識自体が異なる。ここで課題と指摘することも、他の方々は課題と感じていないかもしれない。または著者よりも切に課題と感じている方もいるかもしれない。ここでは、著者が実感している課題として、共生学CGにおける「コミュニティ」と「目的」について論じたい。なお、ここでは著者の主観による部分が多分にあることを先に断っておく。

4.1 共生学コミュニティガーデンにおける「コミュニティ」

共生学CGが一般的なコミュニティガーデンと大きく異なる点として、その立地にある。共生学CGはキャンパス内に立地しているために、キャンパス外との繋がりをつくりにくい環境といえる。そのため、定期的に共生学CGと関係性を形成しやすいのは大阪大学の構成員である。佐倉ら(2022)が指摘するような市民が関わるコミュニティガーデンではなく、特定のコミュニティの人々が関わりやすいのが共生学CGと考えられる。よりミクロに捉えた場合、同様に、人間科学部以外の大阪大学の構成員が関わりにくい場所にあるともいえる。実際、共生学CGは吹田キャンパス内の人間科学部本館近くにあるため、豊中キャンパスのみを利用する人々を始めに人間科学部に関わらない人にとっては、大阪大学の構成員であっても物理的にも心理的にも遠いコミュニティといえる。

共生学CGが仮に共生学系、または環境共生学分野だけの取り組みであれば、社会との接点が限られた、極論すれば、家庭菜園と変わらない取り組みともいえるだろう。共生学CGが「共生学」を実践する場であるならば、環境共生学分野だけが中心となるのではなく多様な人々によって実践することが重要と考えている。そのため、共生学CGのコミュニティを環境共生学分野、人間科学部だけでなく、大阪大学として、地域社会の一部として捉え、開かれた場にする姿勢が不可欠である。現在でも、コミュニティ外との繋がりを捉えた活動は見られるものの、更に意識して取り組む必要があるだろう。

このことは、共生学CGに直接的に関わる人を増やすだけではなく、共生学CGと緩やかな繋がりを持つ人を増やすことでも達成できるだろう。例えば、共生学CGで作った野菜や果物を誰でも直接収穫できるようなエディブルガーデン的な仕組みをつくることもひとつの案と考えている。どのように野菜や果物ができるのかに気づく場として、食料品が高騰する中で無料で生鮮食品にアクセスできる場として、共生学CGと緩やかな関係を形成する仕掛けとして、共生学の実験的な取り組みになるかもしれない。共生学CGのコミュニティに直接的な関わりを持つ人を増やすだけでなく、コミュニティと緩やかな関係を持つ人を増やすことで、将来的に共生学の実践に、そして共生の実現につながっていくと考えている。

4.2. 共生学コミュニティガーデンの「目的」

本章の冒頭でも述べたように、共生学CGは「共生」を実現するための「共生学」の実践のプロセスのひとつ、と捉えることができる。ともすれば、「共生」を実現すること自体が、共生学CGの目的のひとつといえるだろう。しかし、現状は共生学CGで取り組む各人に依存している側面も多々あり、共生学CGを使うこと自体が目的となっている場合もあると思われる。共生学CGを活用することで終わるのではなく、共生学CGで学んだことや得られた知見を社会に還元し、「共生」の実現を目指していくような姿勢が重要と考えている。共生学CGの取り組みが共生学CGの場で完結することが必ずしも最適ではなく、共生学CGで学んだことを、吹田キャンパスで、大阪大学全体で、地域社会で活かしていくような視点も重要といえる。例えば、共生学CGで自然観察に関するスキルを身に付け、そのスキルを大阪大学のキャンパス全域で活かせるように拡張していくことが重要と考えている。当然、共生学CGを活用することも重要であるが、共生学の実践という視点からは十分とはいえない。共生学CGという場を活用するだけでなく、共生学CGでの実践を社会に還元する試みこそが重要と考えている。

こうした共生学CGの「目的」は必ずしも共通認識になるかは分からない。また、抽象的な目的であるため、具体的な目的や目標がなければ活動しにくいという意見もあるだろう。現状、共生学CGは「共生」を実現することだけ

を目的として活動している訳ではない。実際、養蜂や畑など、特定のテーマに関心を持って共生学CGに関わっている方もいるため、関わる全ての人が共生学を探究している場でないことも事実であり、こうした側面はある意味でサークル的な側面を有しているといえるだろう。そのため、共生学CGへの関わり方は、積極的でも緩やかでも各個人にとって望ましい形で構わないし、各個人の目的も多様であって構わないと考えている。そうした多様な目的を前提とした上で、共生学CGの「目的」との共通項を各人が見出しながら「共生学」を実践することは、「共生」の実現に繋がるといえる。

4.3 まとめ

共生学CGにおける「コミュニティ」と「目的」について、個人的な意見を述べた。他にも論じるべき課題（例えば、教員—学生という立場をどのように超えるか、そもそも超える必要があるのか、「人間科学」としてコミュニティガーデンを議論しないのかなど）はあるが、こうした課題は、どのようなコミュニティガーデンにおいても生じうる課題であることから、共生学CG特有の課題ではないかもしれない。しかし、「共生」の実現に向けて、共生学CGが避けられない課題であることも事実である。こうした課題に向き合いながら、共生学CGでの活動を通じて考え続けること自体が「共生学」の実践であり、「共生」の実現に貢献する営みといえる。

5. 終わりに

本稿は、人間科学部本館棟近くに位置する共生学CGの現在と未来について、日々関わる中で感じた私見も含めながら論じたものである。個人的な見解も多々あるため、共生学CGに関わる他の方々が同様の意見を有している訳ではないことを改めて断っておく。しかしながら、大学の中に位置するコミュニティガーデンは、単なるコミュニティ醸成の役割に留まる必要はなく、学術的な貢献があってしかるべき場ともいえる。地域社会の中にありながらも地域社会の中になく共生学CGをどのように社会と繋いでいくかを実践すること自体が、「共生学」の実践といえるだろう。個人的な思いとしても、微

力ながらも共生学の発展に貢献し、「共生」の実現に貢献できるように共生学CGと関わりたい。

6. 謝辞

作成に際して議論いただいた大阪大学人間科学部のモハーチ ゲルゲイ教授、太田貴大准教授をはじめに、共生学CGに関わってくださっている方々に感謝申し上げます。

参考文献

越川秀治

2002 『コミュニティガーデン 市民が進める緑のまちづくり』京都:学芸出版社。

公益財団法人日本生態系協会 監修

2016 『改訂版ビオトープ管理士資格試験 公式テキスト 2級ビオトープ計画管理士・施工管理士対応』東京:日本能率協会マネジメントセンター。

佐倉弘祐・磯部聖太・鈴木悠

2022 「コミュニティガーデンの空間デザインの決定要因に関する研究」『都市計画報告集』20(4): 434-437。

志水宏吉・河森正人・栗本英世・檜垣立哉・モハーチ ゲルゲイ 編

2020 『共生学宣言』大阪:大阪大学出版会。

平田富士男・陳小奇

2003 「サンフランシスコ市のコミュニティガーデンの実態とガーデンコーディネーターの役割」『都市計画論文集』38(3): 751-756。

Guitart, D., Pickering, C. & Byrne, J.

2012 Past results and future directions in urban community gardens research. *Urban Forestry & Urban Greening* 11(4): 364-373.